



巻頭言

インドの環境をどのように改善するのか

環境省 Hideki Minamikawa
地球環境局長 南川 秀樹

インドの環境問題を話題にしたとき、皆さんは何を想像しますか。絶滅の危機にあるベンガルタイガーやインド象でしょうか、あるいは、K2に代表されるヒマラヤの山岳地帯、はたまた、聖地ペナレスで人々が沐浴するガンジス川の水質汚濁でしょうか。世界には約 190 の国と地域がありますが、インドほど受ける印象が異なる国はないと思います。私の第一印象は、人、人、人です。飛行場や駅を出るとき、まず、圧倒的な人の数、彼らが運ぶ熱気と埃、独特の香りが、訪れる人の周りを囲みます。

人口は約 12 億人、毎年 1.5 パーセントほどの増加です。大都会にも田舎にも人があふれ、この世の者とは思えないエネルギーが運ばれます。私はこの広い国のごく一部しか訪れていません。歴史好き人間の一人として 16 世紀までのインド地域の政治状況からはあの広大な地域が一つの国として（周辺の国の独立はあるが）まとめ、これ以上分裂する様子がないことが不思議に思えます。3 世紀にわたりインドを支配したイギリスの知恵が今に生きているようです。インドの政府高官になるためには特定の州との間で数年おきに異動を繰り返します。自分の出身州ではない州にです。そして国家全体と自分が継続して派遣される州の双方の利益のために働きます。彼らエリートにとっては、国と地方が密接に結びついて初めて存立基盤が守られます。それが統一の大きな動機になっています。イギリスがあみだした統治システムの狡猾さ、精巧さを感じます。今も同じシステムなのです。

ただし、個々の行政課題、特に環境行政を例にとれば、インド環境森林省や地方州の環境部局が具体的に対策を進めている様は全く見えてきませ

ん。大都市の大気は交通公害から劣悪であり、そこを流れる川の水質も悪いデータが出てきます。環境省では、20 年度からインド環境森林省との間で環境政策対話を開催し、毎年相互に訪問することとしています。その中から具体的な情報が得られることを期待しています。およそ我々には想像のできない行政の仕組み、取り組みの実態があるのでしょうか。なんせ、カースト制が厳然として残り、固定資産税も相続税もゼロに等しい国です。

地球規模の環境問題、なかんずく気候変動対策に携わる者としては、どのようにアクセスすればインドが世界の枠組みの中で主要排出国の一角をなす国として必要な責務を果たそうとするのか現時点ではアイデアがありません。同じアジアの同胞として、どのような協力ができるのでしょうか。デリー市の中心街の一角に立つ環境森林省からは、間近に世界遺産であるフマユーン廟をみることができます。同じ環境行政に携わる行政官同士、一日も早く温室効果ガスの削減方策を考える日が来ることを期待しています。

